

道綽の聖浄二門判

古川 泰然

道綽教学の聖浄二門判を理解するに就いて、この聖浄二門判を成立せしめた社会背景と、聖浄二門判の立場をたどり、聖浄二門判が構成する教判の内容を考察してみたいと思う。

一、聖浄二門判成立の社会背景

隋、唐仏教界の思想動向の中で特に注目された末法思想を追求することによつて、聖浄二門判を成立せしめた社会背景が明かとなると思う。

この末法思想とは仏教の消極的な歴史観で、三時思想、五濁、法滅の思想のことである。これを根拠として人間性に立脚した宗教を宣揚したのは、三階教の信行、浄土教の道綽である。彼らをして末法意識を抱かしめたのは「大集月藏經」に説かれた「法滅」①、「末法到来」②、「信侶の墮落」③、「釈尊入滅後の法の運命」④のことが、道綽の時代に展開されたことを「安樂集」⑤で

問曰一功衆生皆有_レ私性遠劫以來_レ應值多仏何_レ因_レ至今_レ仍自輪迴生死_レ不出火宅答曰依大乘聖_レ教良由得二種勝法以_レ非生死_レ是以_レ不出火宅何_レ者爲二一謂聖程二謂往生淨土其聖道一種今_レ時難証一由去大聖遙遠二由理深解微是故大_レ集月藏經云我末法時中億億衆生起行修道未_レ有二人得者当今末法現_レ是五濁惡世唯有淨土_レ一門河_レ道入_レ路

と言つて歎かれ、叫ばしめてゐるのは、經典の澆末と現実が一致していることから、今時の衆生を救済する道は浄土門であることを発見することによつて、彼の宗教が成立して行く。

二、聖浄二門判の立場

道綽が末法到来を自覺して、浄土門を主張した意趣は末法今時の衆生に相応する教法、即ち時機相應の教を樹立せんとするにあつたのである。彼は「安樂集」⑥に「若教赴_レ時機易修易悟若機教時乖難修難入_レ」_{ケハ}といひ、更に統いて

計_ル今時衆生即當_レ仏去_レ世後第四五百年正定_ル

懺悔、修福、^キ称^ス仏名号^ノ時^ノ者

と言っている。即ち道綽の浄土教に一貫して時機相應の問題が高揚されなければならなかったのは、末法到来を自覚すると共に、社会不安、度重なる廢仏、教団自身の腐敗墮落等によつて行詰れる仏教全体の打開を計ろうとした爲である。聖道門の諸師が埋仏教によつて末法克服の原理を見出そうとしたのに対して、道綽はあくまでも埋仏教を否定して行仏教を求め、実践の中に民衆を救済しようとしたところに時機の相應、不相應を問題としなければならなかったと考えられる。

三、聖浄二門判の成立

道綽は末法到来という時代背景の中で、自からの立場を時機相應に見出し、この立場に立つて、仏の教法を聖道浄土の二門に分ち、今時五濁惡世の中に於ては聖道を捨てて専ら浄土に帰すべきこと、即ち捨聖帰浄を主張したのである。彼は「懺悔念仏」を以て末法の要法とし、浄土往生を主張したのであるが、それは曇鸞の「往生論註」^⑦を透過して竜樹の「難易二道説」^⑧を受けて成立しているものである。道綽は難易二道判を繼承し、末法

思想を背景としつつ、特に覺証という実践効果に視点を置くことによつて、時と機根と教法との三者の相應、不相應を論ぜんとするものである。

道綽が捨聖帰浄の意を樹立したのは、仏道の実践に於ける浄土門のもつ易行性、普遍性の強調を根本基調とするものである。難易二道判を通して、一代仏教を時機相應という立場より見直したところに聖道、浄土の二門の分判がなされ、そこに聖道門を「去聖遙遠」「深解微」として、その難行性、特殊を見「称仏名号」を浄土門として易行性、普遍性が見られたのである。

道綽は時機教の相應、不相應を論ずる時、自身に適合した救済の道であるか、否かという切実な宗教的要求に終始一貫して、最も機根の低い罪惡衆生に視点を向け、機根の劣悪なる者をも救済する浄土門を強調したのである。その点に於て浄土門が優れた教であることを示したものと云つても過言でないと思う。

註

① 大正大藏経十三、三七九頁「月藏分第二十法藏尽品

- ② 大正大藏經十三 三七五頁
- ③ " " 三七七頁
- ④ " " 三六三頁「分布圖浮提品」
- ⑤ 淨全一、六九二～六九三頁
- ⑥ 淨全一、六七三頁
- ⑦ 淨全一、二一九頁
- ⑧ 真宗聖教全書一、二五三～二五四頁

「一百四十五箇条問答」における

法然上人の念仏思想について

堀 立 瑛

三祖良忠の弟子、望西楼了慧によつて集録された「黒谷上人和語燈錄」の中にある「一百四十五箇条問答」は、法然上人の問答に関する法語の中、最も長いものである。この問答は法然上人の念仏に関する内容が豊富であり、広範囲にわたっている故、研究する事によつてこれからの教化活動、念仏実践に役立つものと確信するものである。

この問答は、徳川中期に義山によつて注釈がなされているにすぎず、単独研究はほとんどなされていない。この問答の成立について見ると、百三十九条に「建仁元年十二月十四日、けさんにいりて問ひまひらす事」と記されているのを始め、後の条はほとんど但し書が見え、又この部分が醍醐本（一期物語）や九巻伝、十巻伝、四十八巻伝に掲載引用されているところから見て、この問答は始めから「一百四十五箇条問答」として存在していたものでない様と思う。すなわち但し書にある「建仁元年」前後にある人がおりおりにかわした問答が百三十九箇条になつたものを、了慧が集録に際して「一百四十五箇条問答」に作り上げたものでなからうかと疑われる。しかし了慧は語燈錄編纂において、世に法然上人の偽作の多くある中で真作と認められるもののみを集録したのであるから、疑問をはさむ事は慎重でなければならない。ここで石井教道博士は、昭和重修法然上人全集六四七頁の脚注に、夢中松風論の「百四十ヶ条問答」を出して成立問題を提起しているが、三田師の「浄土宗史の諸研究」や「夢中松風論」の中の諸問答と、和語燈錄の諸問答を